2024
9
No. 737

國學院大學学報

国学院大学　令和6年9月20日（金）　定期号（毎月20日発行）　1部20円
［発行］国学院大学　［編集］総合企画部広報課　〒150-8440 東京都渋谷区東四丁目10-28　［電話］03（5466）0130　［FAX］03(5466)0528

「言問」
ほと〳〵と
一錢蒸氣くだり行く
見つゝ思へば、時すぎにけり
『倭をぐな』
釈　迢空

祭　儀　■ **月次祭**　10月1日（火）　午前10時　仮殿

研究者に聞く

スポーツ情報戦略の可能性

人間開発学部・渡辺啓太准教授

スポーツ中継を見ていると、選手の競技が映し出されるだけではなく、さまざまなデータが表示される。しかし一昔前まで、そんな状況は夢物語だったといっていいかもしれない。21世紀に入ろうとする時期にスポーツ情報戦略に取り組み始め、最前線で活躍してきた渡辺啓太・人間開発学部健康体育学科准教授は、その裾野を広げてきた第一人者だ。

バレーボール女子日本代表チームのアナリストとして平成22（2010）年に世界初となるタブレット端末を用いた情報分析システムを考案・導入し、32年ぶりの世界選手権でのメダル獲得に貢献。平成24年ロンドン・オリンピックでは28年ぶりとなる銅メダル獲得をバックアップした。その活躍が認められ、今年のパリ・オリンピックでは、TEAM JAPAN本部の情報・科学スタッフおよびバレーボール女子日本代表チームのチームリーダー兼戦略コーディネーターを務めた――華々しいキャリアの中で培ってきた知見を大学という場で展開・発展させている渡辺准教授に、スポーツ情報戦略の面白さや学生たちとスポーツ情報戦略について考えることの意義について語ってもらった。その話に耳を傾けていると、一気に発展してきたスポーツ情報戦略という領域が、成熟の時代を迎えつつあるように聞こえてくる。

4・5面に関連記事

令和6年度オープンキャンパス

3日間で約1万9000人が来場

渋谷・たまプラーザ両キャンパスで8月3、4日と24日にオープンキャンパスが開催され、受験生やその保護者ら約1万9000人が参加した。

今年度も混雑を避けるため、インターネットによる事前予約を実施。多くの企画で予約開始から早々に満席となった。当日は、各学部学科のガイダンスや模擬授業などを通じ、本学の学びの特徴などを説明したほか、学生や教職員による個別相談ブースも設けられた。学生によるトークショーでは、授業の様子や普段の過ごし方を語るなど学生生活の一端を紹介。受験勉強の体験談を語る時間も設けられ、受験生にエールを送っていた。

3日間を通じて、キャンパスの各所で学生と参加者らが会話を交わす様子が見受けられるなど、盛況のうちに終了した。

全国各地で発生した大規模災害で被災された皆さまへ

「7月の大雨による災害」や「台風10号に伴う災害」などにより被災された皆さまに衷心よりお見舞い申し上げます。

被災された学生やそのご家族の皆さまをはじめ、被災地の皆さまの生活が一日も早く平常に復するよう、心よりお祈り申し上げます。

令和6年9月20日　国学院大学

みはるかすもの

天上山に、乳房山。聞き慣れないかもしれない。前者は神津島、後者は小笠原母島と、いずれも東京都下に存在する低山である▼これらの山々は、イラストレーター・小林泰彦氏が深田久弥の名著『日本百名山』（新潮文庫）に敬意を捧げつつ、平成13（2001）年に上梓した『日本百低山』で紹介されている。同書は今夏、ヤマケイ文庫（山と渓谷社）の一冊として刊行された。全国の百の名山が並び、秋の行楽シーズンを前に読者を興奮させる▼より手軽なハイキングコースは、多摩エリアを中心に、本学キャンパスからでも日帰りで楽しめる距離に数多い。普段過ごしている街並みを、少し離れて見やるのも一興だ▼一方、本格的な登山となれば、近年いくつか問題も指摘されている。富士山のオーバーツーリズムは周知だが、北アルプス奥地の山小屋・雲ノ平山荘を経営する伊藤二朗氏は「朝日新聞2024年8月10日東京版朝刊」で、各地で進む登山道の荒廃への危機感を表明している。現状の自然保護制度では手が行き届かず、予算も不足する中で自律的な「道」の手入れがなければ、山と人が切り離されかねない状況であるようだ▼伊藤氏は登山道の整備・維持管理のボランティア体験や、アーティストや研究者たちによる都市部での活動などを通じ、「共有可能な日常としての自然観」の醸成を目指しているという。もし今秋どこかの山に赴くなら、足元で踏みしめるその「道」がどう成立してきたのか、思いを馳せてみてほしい。

主な内容　**2面**／博物館企画展 屏風、絵巻、刷り物などから「神輿とは何か？」をひもとく　**3面**／第49回日本文化を知る講座 神輿と祭りの歴史・継承を語る
4・5面／スポーツアナリストのパイオニアが考えるバレーボールの複雑さとテクノロジーの関係　**6面**／インフォダイジェスト

最終面から K:DNA　**Ⅰ面**／柔道部 複数大会で好成績 10選手が全日本学生体重別選手権へ　**Ⅱ面**／あなたは大丈夫？履修登録ここがポイント！

博物館企画展

屏風、絵巻、刷り物などから「神輿とは何か？」をひもとく

「天王御祭礼宮出之図」（国学院大学博物館所蔵）

国学院大学博物館は、6月29日から9月16日まで企画展「神輿―つながる人と人―」を開催した。

今回の展示は、国学院大学が所蔵する神輿を描いた屏風、絵巻、刷り物などから「神輿とは何か?」をひもとき、「祭りの力」についても考えさせられる内容であった。

まず、神輿が登場するまでの神観念を示す資料として紹介された『延喜式神名帳』では、神社に祀られる神を「坐す」と表現している。神輿は10世紀頃に登場するが、それによって神を移動させる特異なことが可能となった。

さらに展示では『年中行事絵巻』を用いて、12世紀の神輿行列の構成やその発展を紹介。神輿をさまざまな捧げ物や音楽、芸能が先導し、その後に神輿が続くという形が定着していった様子を伝えた。この神輿行列の構成が発展し、地域の祭りとなっていく様子は『付喪神絵詞』『香取神宮神幸祭絵巻』などによって示された。

神輿を用いた祭りは江戸でも行われ、「天王御祭礼宮出之図」＝**写真**＝には、神田神社から銀座・日本橋周辺に向かって神輿が渡御する様子が描かれている。祭りは地域の人々が支えることから、地域と祭りとの関係――神輿や祭りには地域の人々をつなげ、結び付ける力があることが示された。神輿を人と人とをつなぐ媒体と捉えた点に、本展示の特徴が見られた。

国学院大学の神輿サークル「若木睦」が所有する神輿なども展示され、9月7日には所属する学生と「神輿の担ぎ方」の解説や実演をするイベントも行われた。11月に行われる若木祭では、「若木睦」とともに多くの学生がこの神輿を担ぎ地域を巡る予定だ。

また、企画展最終日直前の9月15日には、近隣の氷川神社、金王八幡宮の祭礼があり、渋谷キャンパス付近の住人を中心に構成する「わかば会」の神輿が博物館を訪れ、展示を大いに盛り上げていた。

学問ノ道　第62回

戦前期『國學院雑誌』の雑報欄

こんにちの『國學院雑誌』の誌面は、［論文］［研究ノート］［書評］［講演録］などで構成されており、創刊130年の歴史に相応しい、まことに学術誌然としたラインアップとなっている。

ところが、遡ってみてみると、かつて―明治27(1894)年から昭和15(1940)年まで―の誌面には、署名原稿を載せる点は現在と同様ながら、それ以外にも詩歌を掲載した［長歌・短歌］（大正14〈1925〉年まで）や新刊の情報と概要を取り上げた［新刊］、また新聞の見出しや他機関刊行の雑誌の題目などを列記した［雑誌・新聞要目］など、現在よりも多種多様なコーナーを設けた誌面構成であったらしい。

とりわけ興味深いのは、［最近世界事情］［批評紹介］で、各号刊行時点における社会動静を報じるとともに、読者銘々の関心にもとづく批評なども掲載する点である。『國學院雑誌』は、人文・社会系の学術雑誌であるとともに、諸種の情報や意見の交換をおこなう論壇の場としての役割も併せ持っていたといえよう。

これら、いわゆる〝雑報〟欄には、雑報ゆえの今日的価値を見いだせる。すなわち同誌への寄稿者はおのずから本学関係者であるから、そこで開陳された世界事情や学術界・社会・政治の論評・批評は、かつての国学院大学という地場の近代教育社会史、近代政治思想史、学問史上の立ち位置を示す徴として読むことができよう。

また［彙報］欄では、当該号刊行時点の国学院大学理事会の報をはじめ、講演会などイベントの開催についてや国史学会といった学内学会での研究報告の論題・論者・概要を摘記し、院友の異動情報や訃報にいたる国学院大学内外の動静を事細かに報じる。例えば、大正12年の関東大震災（渋谷校地移転も同年）時には、発災の翌10月刊行（29巻10号）の［彙報］には、「國學院大學関係者の罹災」「今福教授の訃」「院友の被害」「院友死亡」の項を設け関係者の状況を詳細に報じる。震災関連情報は29巻11号、29巻12号、30巻1号、30巻2号と続いた。現在のようにSNSにより状況を発信・共有することのかなわない時代に、『國學院雑誌』はそれら情報のハブとしても機能したわけである。かつての『國學院雑誌』には学術誌であるとともに、同人相互の情報や自由闊達な意見を取り交わすサロンのような雰囲気が漂っていた。このようにみると78巻7号（昭和52年7月）以来常設の［談話室］は、たんなる関係者の随筆というのではなく、在りし日の『國學院雑誌』に漂った雰囲気の一端を残し伝えるものといえ、同誌の硬軟織り交ぜた個性がいまだ健在であることを物語るものといえよう。

震災翌月刊行の29巻10号には、［震災余談］が特設された

研究開発推進機構助教　比企貴之

国学院大学博物館の累計来館者が50万人を突破

平成25（2013）年度に改称して以降の国学院大学博物館の累計来館者が、8月4日に50万人を突破した。

記念すべき50万人目の来館者となったのは、同日に開催していたオープンキャンパスに訪れた高校生とそのご家族。記念品として本学マスコット「こくぴょん」のぬいぐるみや博物館のグッズなどが贈呈された＝**写真**。

国際招聘研究員 研究成果を発表

国学院大学国際招聘研究員として来日したツォーイ・マリーヤ氏＝**写真**＝の研究成果発表会が7月25日、渋谷キャンパスで開催され約20人の学生や教職員が参加した。

マリーヤ氏は「都市の環境:近世日本における景観を理解する」というテーマで、江戸時代の庶民の娯楽であった道中双六を題材に、当時の庶民の観光地などの景観・風景についての認識や、絵双六の構図や画法の特徴などについての研究成果を日本語で発表。研究発表後は、会場の教員や学生らから多くの質問やコメントが寄せられ意見交換がなされた。

小学生対象 生きがい講座 野球を自由研究に

人間開発学部地域ヘルスプロモーションセンターが主催する「生きがい講座 ～目指せ160キロ!! 野球で自由研究～」が8月3日にたまプラーザキャンパスで開催され、小学生と家族約40人が参加した。本講座は、プロ野球選手やチームへの科学的な支援を行う神事努・人間開発学部准教授＝**写真**＝が講師を務め、参加者は人間の骨格や投球技術に関するレクチャーを受けた後、紙鉄砲を用いた速い球を投げるための練習方法を学んだ。

参加した小学生からは「この講座で学んだことをピッチングや自由研究に生かしたい」などといった感想が聞かれた。

第30回「萬葉の花の会」 万葉集の世界観に触れる

万葉集を通して自然や文化に親しむ第30回「萬葉の花の会」が9月3日、たまプラーザキャンパスで開催された。

大石泰夫・文学部教授による「ヤマトの中の吉野－水と龍と神仙思想と－」、渡邉卓・研究開発推進機構准教授による「天平2年－梅花の宴のあった年」、上野誠・文学部教授（特別専任＝**写真**）による「万葉秋づくし」の3講演を行った。

昼食時には、参加者が万葉集に登場する食材を使った弁当を堪能するなど、万葉集の世界観を満喫した。

第49回 日本文化を知る講座

神輿と祭りの歴史・継承を語る

国学院大学研究開発推進機構が主催する第49回日本文化を知る講座「祭り・信仰と地域」が7月20日、渋谷キャンパスで開催され、約180人が受講した。今回の講座では、考古学・民俗学・宗教学の3人の研究者が、地域と祭りの関係について語った。

第1講では、同機構長の笹生衛・神道文化学部教授＝**写真**＝が「神輿・祭礼の発生と展開」をテーマに、神輿が発生した歴史的背景について報告した。9世紀後半から10世紀にかけて洪水・干ばつなどの自然災害が激甚化し、飢饉・疫病がまん延。「こうした不安から救済してくれる新たな神として、神輿で移動する『祭礼』の形が成立した」と述べた。それを支えたのが経済的な発展を背景とした平安京の都市民であり、多くの人々が参加し、観る「祭礼」として成立。地方各地に伝統的に受け継がれた、と語った。

第2講は、小林稔・観光まちづくり学部教授が「祭り・継承・まちづくり」と題して語った。祭りについて「地域の個性が反映され、多くの人が参加する集団性を持つ」と説明。この集団性から、祭りの継承には防犯防災・交通管理、資金繰りなど新たな対応が必要と指摘した。小林教授は「レジリエンス」を「しなやかな強さ」と訳するのが最適とし、「お祭りは単なる観光資源レベルの話ではなく、祭りそのものがレジリエンスの機能を有しており、まちづくりにどう反映していくかが重要」と強調した。

第3講では、黒﨑浩行・神道文化学部長（教授）が「神輿がつなぐ地域のいまと未来」をテーマに、平成23（2011）年の東日本大震災以降に復活した祭礼の事例を多数紹介。「災害後、地域をくまなく巡る神輿が、地域のコミュニティーを包摂する役割を果たしている」と語った。一方で、岩手県大槌町の「大槌まつり」などでは、インターネットを通じた寄付やボランティアによって神輿の担ぎ手の支援や郷土芸能団体の山車・装束の修復ができたとして、「祭礼の継続には地域外からの協力が伴っていることも見逃せない」と述べた。

第15回 教育実践フォーラム

令和の日本型学校教育の実践事例への学び深める

国学院大学人間開発学部教育実践総合センターが主催する第15回夏季教育講座「教育実践フォーラム」が8月1日、たまプラーザキャンパスで開催された。現役教員や保育者、学生ら約340人が参加し、〈「令和の日本型学校教育」を考える～Society5.0時代における子どもの学びと学校づくり～〉をテーマに事例発表や討論が行われた。

冒頭のあいさつで太田直之・人間開発学部長（教授）は「明治32年に教員養成を始め、長く〝教職の国学院〟と呼ばれてきた。その名を受け継ぐ人間開発学部は研究と教育現場との往還の役割を担っており、夏季教育講座はその中核となる事業だ」と開催の意義を述べた。

続いて山梨大学教育学域の三井一希准教授＝**写真**＝が基調講演を行った。三井准教授は中学を卒業した1000人のうち、4年制大学を経て正規雇用で就職し、3年以上離職せずにいる人は163人に過ぎないとのデータを示し、今や「ふつう」の定義が成り立たないと指摘。働き方や学ぶ機会が多様化した社会では「自立した学び手」の育成が必須と述べた。そして令和の日本型学校教育はICT活用を前提にした「個別最適な学び」が求められると強調。「ICTは子どもから直接体験を奪うのではなく、体験が大事だから端末で写真や動画を撮り、クラウドで仲間と共有して振り返りに生かす」と述べるなど、学習者が自ら学びをデザインする意識を低学年から養える環境作りの重要性を示した。

この後、参加者は幼児教育、国語、理科、体育・保健体育、道徳の5分科会に分かれ、同学部の卒業生を含む現役教員らの事例発表をもとに学びを深めた。第2分科会（国語）は「社会とつながる言葉の力」をテーマに討論。学びを教科書や学校の中に閉じ込めず、子どもの自分事にしていく視点などが議論された。また第3分科会（理科）ではメダカの雌雄の見分け方を子ども自身が仮説を立て、観察で検証していく実践などが紹介され、個別最適な学びに向けて教師がどう介入していくべきかといった観点から意見が交わされた。

支援学生の会「ちーへる」主導で企画・運営

夏のわくわく運動会 開催

運動やスポーツに親しんでもらうため人間開発学部地域ヘルスプロモーションセンターが企画した「夏のわくわく運動会」が7月13日にたまプラーザキャンパスで開催され、約30人の小学生と家族が参加した。

小学生たちは学生が考案した安全で楽しい四つのオリジナル競技を楽しんだ＝**写真**。

子ども支援学科の在学生が中心に運営するキッズスペースも用意され、未就学児連れの保護者も安心して競技を見守ることができた。会場は、終始笑顔に包まれ歓声、拍手が飛び交っていた。

国際交流送別会

留学生を学生らが送別

国際交流送別会が7月26日に渋谷キャンパスで開催され、在学生や教職員たちが、K-STEPプログラムを終え帰国する10人の交換留学生らを送別した＝**写真**。

はじめに田原裕子・国際交流推進部長（経済学部教授）が「この留学で出会った本学の学生や家族とのつながりをこれからも持ち続けてほしい」とあいさつし、一人一人に修了証を手渡した。留学生たちは笑顔で修了証を受け取った後、主に日本語であいさつ。最後に留学生と在学生たちの思い出の写真がスライドショーで紹介され、これまでの思い出を振り返りながら今後の再会を誓い合った。

観光まちづくり学部

演習科目 最終成果展示会を開催

7月23日にたまプラーザキャンパスで観光まちづくり学部の演習科目の最終成果展示会が開催された。

当日は、2年次必修科目「観光まちづくり演習Ⅰ（調査手法）」のポスター講評会が行われ、学生が作成した地域の特性・課題をまとめたポスターについて担当教員らが講評を行った＝**写真**。その後、３年次必修科目「観光まちづくり演習Ⅲ（構想・提案）」の全体報告会を実施。横浜・相模原・湯河原・神田・谷中の５地域の選抜グループから課題解決に向けた発表が行われ、西村幸夫・観光まちづくり学部長（教授）から演習科目に取り組んだ学生たちの努力をたたえる言葉が述べられた。

供花神饌ワークショップを開催

供花神饌ワークショップが8月8日に渋谷キャンパスで開催され、学生約30人が参加した＝**写真**。本イベントは、神饌として奉納する供花を作る貴重な機会として開催している。

はじめに針本正行学長が「一つ一つの作業の中で、平安時代から受け継がれている日本の伝統文化を実感してほしい」とあいさつ。その後、参加者たちはグループに分かれ自然素材で作られた和紙やのり、針金などを使用しながら「椿」と「竹」を作成した。本イベントで作成した供花は石清水八幡宮で行われる石清水祭に奉納される予定だ。

研究者に聞く

バレーボールの複雑さとテクノロジーの関係

スポーツアナリストのパイオニアが考える

スポーツ情報戦略による教育実践の展望

人間開発学部・渡辺啓太准教授

スポーツ情報戦略とは何か

専門としているのはスポーツ情報戦略です。

多くの方が、さまざまなスポーツで情報戦略が活用されている場面をご覧になったことがあるかと思いますが、私が高校生の頃にスポーツ情報戦略に興味を抱くようになったのがその黎明期だった、ということを思うと、活用のレベルも展開の幅も大きく変わってきたことを実感しています。

もう少し具体的に、お話ししてみましょう。私が主に関わってきたのは、団体競技、特に球技におけるパフォーマンス分析で、バレーボールを中心としているわけですが、その周辺にはサッカーや野球、バスケットボールなど、他のスポーツも隣接しています。

それぞれに競技特性が異なりますので、スポーツ情報戦略の生かし方も、当然違います。分析が比較的しやすいといわれているのは、野球です。あらかじめ状況がセットされている場面が多い、というのがその理由ですね。ピッチャーとバッターが1対1で勝負するところから毎回プレーが始まりますし、意図せぬタイミングでいきなりピッチャーが投げてくるということもありません。一球投げるごとにカウントは変わっていきますが、都度プレーが止まって整理された状況からリスタートしていくため、分析する上での条件分岐、つまりは場合分けがしやすいといえます。日本のプロ野球をご覧いただければ分かるように試合数もとても多く、集めることができる情報量が申し分ないということも大きいですね。

バレーボールの情報戦略とその課題

バレーボールも、野球に近いところがあります。サーブからはじまり、点が入った瞬間に一連のプレーがいったん止まる。そこで都度、区切れ目があるわけです。これは例えば、卓球やテニス、バドミントンといった、コートの中心のネットを隔てて試合をするタイプのスポーツとも似ているところがある。

今挙げた卓球・テニス・バドミントンなどには、ダブルスが存在しますから、集団競技としての側面が存在します。ただ、これらとバレーボールとの間では、決定的な違いもあるんです。それは、バレーボールは自分たちのコートの中でボールをつなぐことが許されている、という点です。

卓球やテニス、バドミントンにおいては、相手から来たボールやシャトルを自ペアの間でつなぐことは禁じられていて、一回で敵陣に返します。相手が強く打ってきていれば守備的なリターンに、緩い打ち方でしたらチャンスと見なして攻撃的に返していくわけですね。こうした頻繁な応酬の中で守備と攻撃の場面が切り分けにくいことが、分析する上では一定の難しさにつながるんです。

一方でバレーボールの場合は、相手からネットを隔てて飛んできたボールを、まずはレシーブし、その後につないでアタックにもっていきます。つまりは、守り、つなぎ、攻めるという3段階が基本的なワンセットになっていて、守備の場面と攻撃の場面が切り分けやすいという特性がある。ネット競技の中でも、特徴的なところですね。

その上で、バレーボールの情報戦略と、実際の選手たちが見せる創造的なプレーとの間の領域にある、面白さと難しさというものがあります。プレーヤーたちはネットを挟んで、常に駆け引きを行っています。相手の弱点のようなものは蓄積された過去のデータから分析できたとしても、次にこうしたプレーをするだろうという予測というものは、なかなか困難です。いまだったらAIに大量のデータを処理してもらえば予測ができるのでは、と思われがちかもしれませんが、コートの中では一定の駆け引き、もっといえば相手に対するごまかし合いやだまし合いというものが常に発生しています。

例えば、最終セットまでもつれこんだ緊迫した試合で、あと1点とれば勝ちだという重要な局面がやって来たとします。このコースにアタックを打てば、普段の相手のプレーから分析すると、ブロックの指先をかすめて点を取りやすい、という情報戦略活動を元にした提案はできます。しかしその場面では、相手もこちらの情報戦略を逆に予想し、プレーにも組み込んでいて、ブロックの手をわざと引くことでこちらのアタックがアウトになるように仕掛けていることもある。そうした高度な駆け引きが、当たり前のようにコートの中では行われているんですね。

データの山の中からお宝を見つける

スポーツ情報戦略は、さまざまな場面で活用されています。自分たちの映像を分析することによって、普段の練習、つまりは強化や育成において役立てることができますし、試合前に対戦相手のデータを分析することで戦い方のプランを想定していくことができます。

そして試合中におけるリアルタイムでのコーチングの可否は、それぞれのスポーツの競技規則やルールによって異なります。バレーボールにおいては許可されているため、目の前で行われている試合の展開を即座にデータとして記録し、分析して即フィードバックしていきます。これを可能にするのは、ソフトに試合状況を入力していく高速のタイピング技術であり、現在においてもここは手入力、つまりは人力で行っているんです。

既に終了している試合の撮影データに関しては、インドに作業拠点がある専門の会社に依頼し、ビデオファイルからデータ起こし〟をしてもらいます。このデータ起こしというのは、映像を分析可能なデータの形にする作業で、例えばこのインタビューの音声を文字に置き換えていくテープ起こしのようなものだと考えてください。そうした作業を専門の業者さんが、時にテクノロジーの力も借りつつ人力で短時間のうちにデータ起こししてくれ、私たちはそのデータをもとに分析を進めることができるわけです。

昔はこの映像のデータ起こしを全て自分たちでやらなければなりませんでした。自チームの試合映像のみならず、対戦相手の映像も全て一から見てデータにしていかなければいけない。その作業の負担がとても大きいのは、ご想像いただけると思います。

今でも試合中のデータ入力が大変なのは先述した通りです。ただ、既に収録されている映像のデータ起こしに関してはアウトソーシングできるようになってきているので、そのぶん空いたリソースを、取得したデータを用いた分析に重点的にあてていくことが可能になっています。

データの活用の仕方も、だんだんと変わってきました。以前ですと、指導者が考えている仮説を検証し、戦術に反映させていくためにデータを用いるということが多かったのですが、今はアウトソーシングによって大量の情報を取得しやすくなっているため、そのデータの中から何か新しい発見ができるのか試みていく——いわゆる発掘・探索型のアプローチでデータ分析を行うことが多くなってきています。データの山から、いかにお宝を発見できるか。スポーツ情報戦略は、既にそうしたフェーズへ入っているとも言えます。

AIを用いた情報分析の限界と可能性

一方で、AIの活用についてはまだまだ発展途上です。私自身、かれこれ10年ほど、AIを用いたデータ分析の可能性を模索しています。バレーボールの選手や指導者にヒアリングすると多く聞かれる声として、「相手のセッターが次にどこにトスを上げてくるのかが分かれば、とても助かる」という話が挙がります。スポーツデータ分析の専門家としてこの要望を引き受けるとすれば、いかにセッターの頭の中をのぞけるかということになり、AIの活用も、こうした文脈において探究しているわけです。

とはいえ、機械学習させるデータの与え方に、課題があるように考えています。例えば相手チームに、普段多くの得点を取っているエースのアタッカーがいるならば、セッターがその選手に多くのトスを上げるだろう、というように人間であれば一定のバイアスと共に分析をしていきます。しかしAIに対してフラットにデータを与えると、良くも悪くもこうした人間にはバイアスとなっている前提条件を抜きにして分析してしまうことがあります。

AIに正解を与えない学習のさせ方を「教師なし学習」、正解を与える学習のさせ方を「教師あり学習」と呼ぶことはご存じの方もいらっしゃると思います。バレーボールの情報戦略に今後AIをより活用していくには「教師なし学習」では限界があり「教師あり学習」に用いるデータをどのように用意していくのか、そこを考えていく必要がありそうです。優れたコーチの方が予測できたが予測できたとしたら、そこに含まれている暗黙知をどのようにデータに落とし込んでいくのか、ということですね。

スポーツ情報戦略は、さまざまな競技レベルや場で役立ててもらえるということを、改めて実感しています。例えばトップレベルの選手や指導者の方々に、試合中にボールが動いている時間はどれくらいか質問すると、半分ぐらいではないかといった答えをいただくことが多いのですが、データを見ると試合時間の5分の1程度だったんです。つまり、試合中8割方の時間はプレーしていないということが見えてきて、するとその時間の使い方に対する意識が変化していき、可能な準備、振り返り、コミュニケーションなどを重視して考えていくことができます。

一方、本学で授業をしていると、さまざまな競技に関心を持つ学生が集うので、いろんなスポーツおよびそのゲーム構造を分析し、みんなで学び合うことができます。これはバレーボールの指導や分析にのみ従事している場合は得られない体験で、とても刺激的です。そして、一つの競技に特化するだけではない、横断的に活躍するスポーツアナリストが生まれていくような、そんな人材の育成につながっていけばという思いもあります。

また教職志望の学生が多いということもありまして、スポーツ情報戦略の知見を将来、それぞれの教育実践の場で生かしてもらえれば、とも感じています。例えば中学校や高校で部活動を指導する場合でも、データを活用することは教員自身の助けにもなりますし、問題視されるような行き過ぎた指導を防ぐことにもつながるかもしれません。

トップアスリートの助けとなるだけでなく、よりいろんな方々に対象を広げていくスポーツ情報戦略の活用——スポーツ界特有の勝ち・負けだけでなく、スポーツ情報戦略を活用することで生まれる新たなスポーツの価値を追求し、社会に広がっていくその可能性の根っこを形づくることに、やりがいを感じています。

わたなべ・けいた
修士(体育学)。専門はスポーツ情報戦略、高度競技マネジメント。主な著書に、『なぜ全日本女子バレーは世界と互角に戦えるのか—勝利をつかむデータ分析術』(2012年、東邦出版)、共著書『考えて強くなるバレーボールのトレーニング:スカウティング理論に基づくスキル&ドリル』(2016年、大修館書店)など。今夏のパリ・オリンピックでは、TEAM JAPAN本部の情報・科学スタッフおよびバレーボール女子日本代表チームのチームリーダー兼戦略コーディネーターを務めた。

インフォダイジェスト

…在学生　…保証人　…卒業生　…一般　…受験生
内内容　日日にち　時時間　場場所　対対象　定定員　料料金　申申し込み　問問い合わせ

大学からのお知らせ

第8回渋谷区長への施策提言を募集します

内本学では渋谷区と連携し、学生ならではの施策提言を行っています。8回目となる今回のテーマは「①ふるさと納税での寄付増収のための施策」「②海外都市との姉妹都市協定に基づく事業連携」「③まちのコイン『ハチポ』の活用を促進するための取り組み」です。発表では学生の皆さんから直接、長谷部健区長へ提言を行い、ご意見をいただきます。応募方法詳細は本学HP（**二次元コード**）でご確認ください。

【発表】10月30日㈬にパワーポイントを用いた10分間のプレゼンテーション。応募多数の場合は選考を行う可能性あり

【表彰】区長賞、学長賞（各賞金5万円）、その他表彰、参加賞

対本学の学部生、大学院生

申9月20日㈮までにエントリー（代表者氏名、学部・学科、連絡先を下記アドレスへメールで送信してください）

問企画課（☎03・5466・0395、✉kikaku@kokugakuin.ac.jp）

7月からの大雨および台風10号などによる災害で被害に遭われた皆さまへ

内7月からの大雨や台風10号などによる災害などをはじめ、災害救助法が適用された地域に主たる家計支持者が居住し、家計の急変で今後の学業生活に支障をきたすおそれのある学生は、保証人（父母ら）と相談の上、下記の大学各窓口までご相談ください。適用対象地域は本学HPや内閣府防災HPでご確認ください。

問▶学生生活課（☎03・5466・0145）
▶たまプラーザ事務課（☎045・904・7714）
▶大学院事務課（☎03・5466・0142）

イベント

第15回 共育フェスティバル

内地域の子どもたちに学び、遊び、体験を通じて楽しんでもらう共育フェスティバルを開催します。絵本のお話し会や身近な材料を使ったおもちゃ作り、コンサート、実験・工作体験など17企画でお待ちしています。詳細や参加にあたっての注意事項は大学HP（**二次元コード**）でご確認ください。

日10月27日㈰10～15時
場たまプラーザキャンパス
料無料
申当日受付
※人数制限のあるイベントについては、当日各イベント会場で整理券を配布いたします。
問たまプラーザ事務課（☎045・904・7700）

第9回 地域交流スポーツフェスティバル

内今年のテーマは～チャレンジ！スマイル！ハイタッチ！～。幅広い年代(子ども～シニア)の地域の皆さんに楽しんでいただける全身を使う遊びや運動、各種測定（ロコモ、筋力、骨密度、栄養）、応急処置体験など、10個以上のブースが大集合します。今年は野球、サッカー体験教室も開催！　お一人でのご参加も大歓迎です。人間開発学部の学生が皆さんをお待ちしております！

日10月20日㈰10～15時
場たまプラーザキャンパス
対年齢不問
料無料
申本学HP（**二次元コード**）から申し込み
問人間開発学部地域ヘルスプロモーションセンター（✉kchpc@kokugakuin.ac.jp）

令和6年度 オンライン公開講座「稽古照今のオリンピック」

内この度のオンライン公開講座は、本学人間開発学部健康体育学科の教員を講師に迎え、オリンピックの理念と歴史、近代オリンピックの功罪、アスリートの価値とサポートなどをテーマに実施します。オリンピックの日本社会への影響や、アスリートの役割と価値の変化などについて振り返り、未来への展望について探っていきます。
※視聴にはパソコン・スマートフォンなどの端末とインターネットに接続できる環境が必要です。

日9月24日㈫～10月31日㈭
料4500円（全3回）
申10月24日㈭まで。専用HP（**二次元コード**）から申し込み
問エクステンションセンター（☎03・5466・0270、✉jigyou@kokugakuin.ac.jp）

キャリアサポート

※詳細確認・申し込みはK-SMAPYⅡから行ってください

大手優良企業が多数参加「企業セミナー」

内各業界のリーディングカンパニーの採用担当者が、業界や企業の説明をします。この機会に志望する企業や業界への理解を深めましょう。志望業界が定まっていない人は、まず企業の話を聞いて興味・関心の幅を広げていきましょう。

日9月24日㈫～10月31日㈭の平日のみ、11月6日㈬
対学部1～3年生、院1年生

博物館

料無料
時10～18時（最終入館17時30分）。祝日を除く月曜休館
※博物館関連イベントの問い合わせは☎03・5466・0359

特別展「文永の役750年 Part1 海底に眠るモンゴル襲来―水中考古学の世界―」

内今年はモンゴル帝国が鎌倉時代の日本への侵攻を図った文永の役からちょうど750年です。日本にとって、モンゴル襲来は白村江の戦い以来となる数百年ぶりの国際戦争であり、その経験と衝撃は戦闘に参加した竹崎季長による『蒙古襲来絵詞』や博多湾沿岸に残る「元寇防塁」、あるいは各地に残る伝説などの形で伝えられてきました。また、長崎・佐賀県境に位置する伊万里湾には2度目のモンゴル襲来の際、軍船4400艘に乗った約14万人の元軍が暴風雨に遭って壊滅した「神風伝承」の舞台である鷹島海底遺跡があり、遺跡を管轄する長崎県松浦市では1980年代からその実態を解明することを目的とした水中考古学調査を継続的に実施してきました。本展ではこれまでの鷹島海底遺跡における水中考古学調査研究について紹介するとともに、モンゴル襲来の歴史的位置付けとその後の影響について今日的な視点から問い直すことを目的としています。

日9月21日㈯～11月24日㈰
場博物館企画展示室

おやごころこのおもい　第23回

名誉教授 **新富 康央**

しんとみ・やすひさ
学校法人国学院大学特別参事。人間開発学部初代学部長、専門は教育社会学、人間発達学。新しい時代の子育て論には定評。

「叱責」よりも「期待」の厳しさを
～「本ヲ立ツル」人育て～

たくさんの感動を残して、パリ・オリンピックの幕は閉じました。とりわけ日本の選手団は、国民の「期待」を背にして、頑張ってくれました。どの選手も、自分たちを後押ししてくれた支援への感謝の言葉を口にしました。

それは、欧米風の「(外から)つくる」のではなく、「(自ら)なる」子どもを育てようとした我が国古来の「修理固成（つくりかためなす）」の子育てに起因するといってよいと思われます。

それでは、国学院大学の「告諭」にある「本ヲ立ツル」という日本の伝統文化に基づいた神道精神を基礎とする人育ての観点から、私たちが学ぶべき教訓とは何でしょう。

それは、「叱責」よりも「期待」という厳しさを、ということです。

教育の現場でも、「子どもに寄り添う教育」が叫ばれています。その際の「寄り添う」ためのコモディティ（根幹の交換資源）が、子どもへの「期待のエール」なのです。

しかし、なぜ「期待」が、「叱責」はともかく、「厳しさ」につながるのでしょう。その一例を、太宰治の『走れメロス』に見ることができます。

「私は信頼されている」。青年メロスは自分の命を顧みないで、夕陽に向かって死力を尽くして3日間走り続けます。自分を信じ、待ってくれている竹馬の友のために。

メロスが引きずられた「わけのわからぬ大きな力」こそ、他者から自分への信頼に基づく「期待」という大きな力でした。

明治以降の我が国の子育ては、どちらかと言えば「叱責」という厳しさに寄りかかっていました。しかし、「期待」されるという厳しさを、もっと求めてもよいのではないでしょうか。

では、「期待のエール」とは何でしょう。その基本は、「おはよう」、「お帰り」などの挨拶（あいさつ）です。

「挨」は心を開く、「拶」はあなたを受け入れるという意味です。心理学的には「挨拶」は、エチケットの範疇を超えた教育的行為なのです。

しかし、期待のプレッシャーで押しつぶされそうになる時もあるでしょう。そんな時は思い切って、「雨ニモ負ケテ、風ニモ負ケテ」みる勇気も大切です。本来は「雨ニモ負ケズ、風ニモ負ケズ」と、親として後押しするところです。しかし、「雨ニモ負ケテ、風ニモ負ケテみると楽になるよ」との声もかけてください。

前回に引き続いて今回も、家庭教育（庭の教え）の大切さを詠った「明治天皇御製」を掲載します。

「若竹の生ひゆく末を思ふ世に　庭の訓（ヲシヘ）をおろそかにすな」（若竹の成長してゆくその末のことを思う時、家庭の教育をおろそかにしてはならない）

あなたは大丈夫？ ここが 履修登録ポイント！

4月18日から5月8日までの期間に実施し、1176人の学生が回答した「令和6年度 前期 履修登録に関するアンケート」の結果などを基に、大学生が避けては通れない履修登録について、本学学生の履修に関する現状をお伝えし、充実した学びに向けた履修登録を行うためのヒントを紹介します。

調査結果の詳細については、本学HP（**二次元コード**）で公開しています。

令和6年度前期　履修登録に関するアンケートより

履修登録時に参考にした情報源は？
（複数回答可）

1. 履修要綱 …… 1092人(92.9%)
2. WEBシラバス …… 982人(83.5%)
3. WEB時間割 …… 650人(55.3%)
- 履修登録の手引き …… 329人(28.0%)
- K-SMAPYⅡ利用ガイド …… 81人(6.9%)

履修要綱・WEBシラバスはほぼ全員が、WEB時間割は約半数が参考にしていました。履修登録の手引きには履修ルールが記載されているので要確認！

履修登録時に相談した相手は？
（複数回答可）

1. 友人 …… 809人(68.8%)
2. 先輩(サークル等) …… 417人(35.5%)
3. 家族 …… 204人(17.3%)
- 職員(教務課・たまプラーザ事務課) …… 181人(15.4%)
- エルダーサポーター …… 107人(9.1%)

友人や先輩、家族などの親しい方への相談が多数。専門性の高い事務局職員やエルダーサポーターにも履修相談できるのでぜひ活用ください。

履修登録時、重視した点は？
（複数回答可）

1. 授業内容 …… 946人(80.4%)
2. 時間割 …… 881人(74.9%)
3. 評価方法 …… 690人(58.7%)
- 対面-遠隔の実施形態 …… 432人(36.7%)
- 教員の評判 …… 342人(29.1%)

授業内容が最も重視され、次いで時間割や評価方法、授業形態などが複合的に考慮されています。教員の評判も相談相手から聞き、参考にしている模様。

履修登録は順調だった？

1. ある程度順調 …… 549人(46.7%)
2. あまり順調でない …… 295人(25.1%)
3. 順調 …… 210人(17.9%)
- 順調でない …… 122人(10.4%)

回答者の学年とクロス集計分析したところ、「順調でない」「あまり順調でない」の回答者は低学年で高割合。今後、エルダーサポーターをはじめとした、履修相談体制と周知を強化していきます。

教学事務部長 松本忠和

履修登録は学期ごとに自身の学修計画を立て、卒業に必要な科目や興味のある科目を選んで登録する重要なプロセスです。本学では多様な分野の科目を提供し、実践的スキルの習得、国際的視点の育成、キャリア形成などもサポートしています。履修登録を通じて学修の進捗を確認し、目標達成に向けた行動計画を立てましょう。

エルダーサポーターって？

前・後期の履修登録期間中に、2～4年生の在学生が皆さんの履修や学生生活の相談に乗ってくれます（予約不要）。活動予定については、大学HPに掲載しますので、チェックしてください。

必修科目がまさかの落選

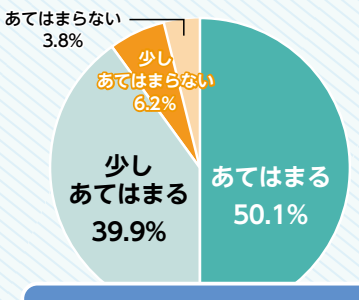
教務課、たまプラーザ事務課へ

抽選のある必修科目が落選となった場合には、教務課やたまプラーザ事務課で対処方法について説明しているのはご存じでしょうか？　実は多くの方がそのことを知らずに諦めてしまっているように見受けられます。抽選で必修科目が落選となった場合には、履修期間中に両課にお気軽にご相談ください。

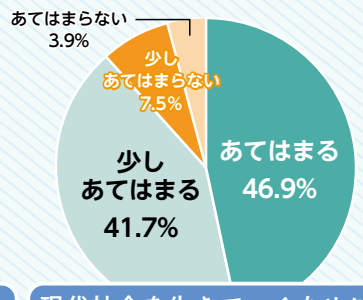
令和5年度卒業生アンケート　履修・学修成果に関する結果抜粋より

例年、3月の卒業証書授与と併せて実施している卒業生アンケートの令和5年度分の調査結果がまとまりました。この調査は、学修成果や大学生活の満足度など6項目全20問で実施し、学部の卒業生2252人中2031人が回答しました(回答率90.2%)。その中から、履修や大学での学修成果に対しての自己評価に関する調査結果を抜粋したのでぜひ参考にしてください。

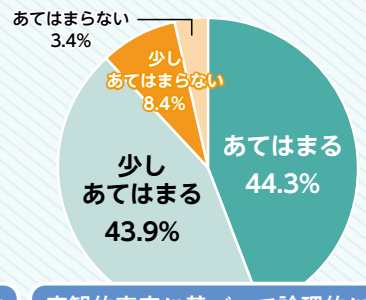
調査結果の詳細については、本学HP（**二次元コード**）で公開しています。



これからの人生に必要な知識や技能が身に付いた



現代社会を生きていくために必要な思考力・判断力・表現力が身に付いた



客観的事実に基づいて論理的に思考し、その過程や結果を他者へ説明する力が身に付いた

後輩へのアドバイス

- 履修した科目が自分に合わないと途中で投げ出したくなっても、最後まで取り組めば、新たな発見や経験、最後までやり抜いた自信が得られるので最後まで諦めずに取り組んでほしい。
- 学年が上がった際に、履修したい科目が抽選になることもあるので、早め早めに履修するようにしてください。
- 所属学科にとらわれず、さまざまな領域の科目を履修することで興味関心の幅が広がったので、さまざまな科目を履修することがお勧めです。
- 必修科目は出席日数をきちんと確認してください。

教務課

履修登録は、基本的に自分自身で履修要綱を確認しながら行いますが、誤った認識のまま履修登録をしてしまうと、進級や卒業ができなかったり、資格が取れなかったりする可能性があります。分からないことがあれば、遠慮なく教務課にご相談ください。

もし教務課への相談がハードルが高いと感じる場合は、どうぞお気軽にエルダーサポーターにご相談ください。

学修支援センター

「こんなことで相談してもいいのかな…？」と思うことでも、学修に関することなら、何でも学修支援センターにご相談ください。授業課題の取り組み方、資格試験の対策方法、卒業論文のテーマ検討や書き方など、専任の教員がサポートさせていただきます。個別相談だけでなく、講座やワークショップも定期的に開催しているので、ぜひご関心があればご参加ください。

履修や学修で相談したくなったら…

たまプラーザ事務課

履修登録、教員免許や保育士資格取得に向けた各種手続きの他、学修全般についての相談も受けております。必要に応じて学生生活やキャリア支援との連携、学部の先生方との接続を行い、キャンパス一丸となって学生の学修をサポートしております。

皆さんの学びが有意義なものとなるよう全力で応じますので、何か相談ごとがあれば遠慮なく窓口までお越しください。

大学院事務課

大学院では学問研究に関する専門知識の修得に加え、課題を客観的・相対的に検証し、先行研究を踏まえて新たな知見を加えた論文を作成することが必要です。制度として、コースワークや複数教員による論文指導等があり、これらを通じて自らの研究を多角的に捉えることが可能です。

履修に関する疑問があれば随時サポートしていますので、遠慮なく大学院事務課にご相談ください。

K:DNA

2024 9

K:DNA ── 創立142年を迎えた国学院大学の遺伝子…個人・個性を尊重する校風　若いエネルギーが未来を変える

柔道部

複数大会で好成績
10選手が全日本学生体重別選手権へ

東京学生柔道体重別選手権で表彰台に上がった宮部、羽田野、阿久津、中村、大塚選手（左から）（同部提供）

7月から9月にかけて国学院大学柔道部が各大会で優れた成績を収める活躍を見せた。

7月7日に東京武道館（東京都足立区）で東京都ジュニア柔道体重別選手権大会が開催され、男子81kg級の杉野瑛星選手（観まち2）が優勝した。同66kg級の坪井蓮矢選手（史2）が準優勝、同60kg級の中野来飛選手（神文1）と同81kg級の林建成選手（健体2）が3位となり、それぞれ表彰台に上がった。この結果、4選手は9月8日に高崎アリーナ（群馬県高崎市）で行われた全日本ジュニア体重別選手権大会に出場。林選手が2位、杉野選手が7位となり、林選手は11月に開催される講道館杯全日本体重別選手権大会の出場権を獲得した。

9月1日には、男子43回・女子40回東京学生柔道体重別選手権が日本武道館（東京都千代田区）で開催され、男子73kg級の阿久津友春選手（法4）と同90kg級の中村俊太選手（健体4）が優勝した。また、同60kg級の宮部真臣選手（観まち3）と同66kg級の羽田野啓太選手（健体4）、同73kg級の大塚遥人選手（神文4）が3位に入賞する結果となった。この大会は10月に行われる全日本学生柔道体重別選手権大会の予選を兼ねており、同部からは表彰台に上った選手に加えて入賞した計10選手が挑戦する。

ソフトテニス部

東日本大会
女子団体優勝、濱島選手シングルス優勝

優勝を飾った同部女子Aチーム（左）と濱島選手（同部提供）

第74回東日本大学対抗ソフトテニス競技大会が7月13、14日にサニーテニスコート（千葉県白子町）などで開催された。国学院大学ソフトテニス部は男女とも4チームが出場し、久保田茜選手（日文4）・原千晴選手（中文4）、丸田梨瑚選手（初教1）・濱島怜奈選手（初教3）、庄司琴里選手（初教4）・高嶺心萌選手（中文3）の3ペアからなる女子Aチームが本大会で初優勝を飾った。

本大会は女子の部に27大学50チームが出場。初戦は3勝で日本体育大学Eチームに勝利し、続く東京女子体育大学戦は3勝2敗で勝利。準々決勝は立教大学Aチームに3勝2敗で勝ち進むと、準決勝は明治大学に3勝1敗で勝利した。全日本大学ソフトテニス王座決定戦でも対戦した日本体育大学Aチームとの決勝戦では3勝1敗と勝利を収め、見事優勝を飾った。

7月16、17日に第67回東日本学生ソフトテニスシングルス選手権大会が同会場で開催され、国学院大学ソフトテニス部からは男子4選手、女子24選手が出場した。女子の部は157人が出場する中、濱島選手は並み居る強豪を抑え、見事本大会で初優勝に輝いた。

これらの大会や過去の大会の結果により、同部女子と濱島選手は9月に開催される全日本学生選手権大会および全日本学生シングルス選手権大会への出場を決め、全国制覇に挑戦する。

好記録を打ち出した平林選手（同部提供）

陸上競技部

北の大地で 3大駅伝に向け好発進

ホクレンディスタンス大会の第2戦網走大会が7月10日、網走市営陸上競技場（北海道）で雨が降る中開催され、主将の平林清澄選手（経営4）が10000mで、昨年の記録27分55秒15に惜しくも届かないものの27分58秒19と27分台の好記録を打ち出し5位でゴールした。

7月14日に網走市営陸上競技場で開催された関東学生網走夏季記録挑戦競技会では、男子5000mに1人、10000mに9人出場した。10000mの3組では高山豪起選手（法3）が、4組では辻原輝選手（史2）がそれぞれ組トップでゴール。高山選手は自己ベスト記録となり、本学歴代記録10位。辻原選手も自己ベストを更新した。5000mに出場した浅野結太選手（経営1）も自己ベストで本学歴代記録8位の記録をたたき出すなど、本大会では出場選手10人中7人が自己ベストを記録し、10月の出雲駅伝から始まる3大駅伝を前に、チームが勢いづく結果となった。

硬式野球部

東都大学野球 秋季リーグ開幕

東都大学野球秋季1部リーグが9月9日、神宮球場（東京都新宿区）で開幕を迎えた。国学院大学硬式野球部は、第1週で今春優勝の青山学院大学と対戦し、1勝2敗となった。

9月9日の開幕戦は、一回表に1点を先制されるも一回裏の連続タイムリーヒットで2点を取り返した。しかし、その後追加点を奪われ試合は2-6で勝利には届かなかった。10日の第2戦では、0-0で迎えた六回表に立花祥希選手（健体3）のタイムリーヒットで先制。リーグ戦初登板の山口逸貴投手（神文3**＝写真**）が七回途中まで0点で抑える好投を見せ、そのまま1-0で勝利。11日の第3戦では0-6で迎えた六回表に柳舘憲吾選手（法4）がソロ本塁打を放ち、七回表の満塁のチャンスで2点を、八回表でさらに2点取るも届かず5-6で試合を終え、開幕第1週を終えることとなった。

第2戦で好投を見せた山口投手